

歌人としての二条院讃岐について

—名歌「沖の石」を中心にして—

小川典子

二条院讃岐は、『尊卑分脈』などによると、源頼政の娘のようである。

二条天皇（在位一一五八〜一一六五年）の女房となり「讃岐」と名乗って宮仕いをする。讃岐は歌人として知られ、『正治二年院初度百首』や『千五百番歌合』などにも詠歌を残し、勅撰集には『千載和歌集』以下『新統古今和歌集』にいたる一四の歌集に七三首も入集している。私家集『二条院讃岐集』に現存する歌九八首はその一部に過ぎない。

父頼政・祖父仲政・兄仲綱も秀れた歌人で、讃岐は当時の歌壇において、中枢と見られる人々に囲まれた環境の中で成長したようである。

三位となった頼政は、『平家物語』第四「鴉」によると、「よしなき謀叛行いて、宮をも失い参らせ、我身も滅びぬこそうたてけれ」とあり、父の謀叛を憚ってか、二条院讃岐は一時期歌壇から遠ざかっていたが、建久五年の中宮御方（宜秋門院）の宮中歌会から再び名を見ることができ、このときの歌会には女流歌人の参加は讃岐と丹後の二人だけであったことから当時の歌壇における讃岐の評価の高さが想像される。

勅撰集に多くの歌が撰ばれ、また有名な歌合・歌会にも多くの歌を出詠しているので、当然名歌は何首もあるが、中でも「沖の石の讃岐」の異名を得た『二条院讃岐集』五一番に「石に寄する恋」と詞書した歌、

我袖は 潮干にみえぬ 沖の石の 人こそしらね かわくまぞなき

が、その代表とできる。右の歌は、「千載和歌集」七六〇（七五九）番に「寄石恋と言へる心を詠める」として収載され、さらに「百人一首」九二番にも五句を「干く間もなし」として選定され、その評価が高められるとともに定着するようになったようである。

その評価に関しては『愚秘抄』に「萱齋院（式子内親王）、宜秋門院丹後、二条院讃岐、宮内卿、亡父卿女（俊成女）などぞ、女歌には秀れて覚え侍る。此人々の思入れて詠めらん歌をば、有家・雅経・通具・家隆なども詠み抜き難くや」とあり、定家撰の『新勅撰和歌集』には、讃岐の歌が二三首も撰ばれていることでも高い評価の程が偲ばれるだろう。

『百人一首』の、

我が袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 干く間もなし

の形で広く世に知られるようになるのだが、定家は「人こそ知らね」「干く間ぞなき」と係り結びが四、五句と続く重々しさから解放すると同時に「干く間もなし」と他を類推させる意の係助詞「も」をいれ、「人（相手）」に知られないだけでなく、泣く涙に濡れにぞ濡れた袖も干く間もありません」と最後は「なし」と終止形でさらりと言いつつという形に修正したのは、「近代秀歌」に、「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿を願ひて、寛平以往の歌に習はば、自らよろしきこともなか侍らざらむ。古きを希ふにとりて、昔の歌の詞を改めず読み据ゑたるを、

即ち本歌とすと申すなり」とあるように藤原定家の秀歌の理念に基づくことなのであろう。

この歌が称えられるのは比喻に用いた「沖の石の」という言葉のもつ奇抜というか機知的な趣向にあると思われる。「石に寄せる恋と言へる心」という石にかこつけて恋の本質的心情を詠めという題を与えられたことよって成立したのである。この何かの「物に寄せ」て「心情を陳べる」という表現様式は中性に復活するのだが、早くには「万葉集」に見る「寄物陳思」の流れをくむ表現様式なのである。もちろん、これは当時以後盛んになる「百首歌」と深い関わりを持つのであるが、それにしても「恋」を詠むのに「石」を喩えにするなどというのは、珍しいと言わざるを得ない。

「物に寄する思ひを陳ぶる」という題の中にあっても「石に寄する恋」は珍しく、歌数もそれほど多くはない。

頼政と俊恵は「歌林苑」や頼政邸でしばしば歌会を共にしていた仲で、讃岐は頼政の娘であると同時に、「歌林苑」における主な歌人で歌壇の中心にいた。

特に頼政の歌、

厭いとはるる 我が汀なみには 離はなれ石の 掛かくる涙に 揺ゆぎ気げぞなき

は、平氏全盛の時代に耐え忍んでいる男（源氏である頼政自身）の悲痛な心が浮かび上がってくるようなこの恋歌は、讃岐に強烈なインパクトを与えていたと思われる。

このように見ると、父頼政の「離れ石の掛くる涙」の語が讃岐の心に残り、やがてその残影は「沖の石」の発想に繋がって、

我袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 干く間ぞなき

という歌に結実したとも思われる。この歌意は「恋の涙で濡れた私の袖は、潮干の時にも見ることでできないずっと沖の海底にある石のように、あの人は知らないけれども、（私の）袖は涙で濡れっぱなしで乾く間もないのですよ」といったもので、自分の片思いの恋心を海底に隠れている「沖の石」に託して詠んだものである。

「寄石恋」という題は、讃岐の発案になるものではないようであるが、歌題の「石」を「沖の石」とイメージしたところなど独創的発想である。頼政の歌で、

厭はるる 我が汀には 離れ石の 掛くる涙に 揺ぎげ気ぞなき

ともすれば 涙に沈む 枕かな 潮満つ磯の 石ならなくに

奈胡の海 潮干塩見つ 磯の石と なるるか君が 見え隠れする

父のこの三首がなければ讃岐の「沖の石」の歌は生まれてこなかっただろう。

『百人一首精説』にも「父のこれらの作がなければ讃岐の歌は詠まれなかったであろう。しかし、父の歌より巧みであることは云ふまでもない。磯の石を読まないで沖の石を詠み込んだところが讃岐の手腕である。」と記されている。

「沖の石」が有名になると、ただの石ではなく、無間地獄の蓋である「沃焦石」と付会の説がつき、「沖の石」の場所としても、福井県小浜市新保の湾内の辺り、宮城県多賀城市八幡末の松山の南側にある「沖の井」と呼ばれる池、そして琵琶湖の多景島（滋賀県彦根市八坂町）の西方にある「沖の白石」と呼ばれる岩礁があげられている。

定家仮託の『三五記』驚末にはこの「沖の石」の歌について「ただ喩えばかりにて興なき歌」の例えとしてあげられ、「この歌に全く興あるところなし」といつているが、はたして、『三五記』がいうように平凡な歌なのか、それと

も、卓越した秀歌なのだろうか。

類歌としては、「和泉式部集」九四番の歌に「恋」の題で、

我が袖は 水の下なる 石なれや 人に知られで 干く間もなし

がある、讃岐の歌と並べてみると、

我が袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らぬ 干く間もなし

であり、「両歌はほとんど同じである。

その違いは、和泉式部の歌の「水の下なる 石なれや」に対して讃岐の歌は「潮干に見えぬ 沖の石の」とあり、同じく「人に知られで」が「人こそ知らぬ」であるところだが、表相の意味も主題も同じである。

歌題をよく理解して詠み、その場その時に応じてふさわしい歌に仕立てることは、それ程たやすいことではない。和泉式部の「恋」に対して、讃岐の場合は「石に寄する恋」とある。和泉式部の題は何の規制もなく、ただ主題である「恋」を詠むのである。そんな二重の枷を負わされての作歌である。

和歌は、歌題とするものをいかにイメージし、いかにそれを表現するかというのが普遍的原则であるが、両歌は相手に知られない恋を詠むのが共通した主題で和泉式部は「水の下石」に喩える。「石なれや」と疑問を持っていうのだから、その心の背後には、そうでないかも知れない。またそうあってほしくない。という未練の心が見え隠れする。対して、讃岐は「沖の石」に喩える。「磯の石」や「離れ石」ではなく、また、遠く離れた「沖」にあっても、潮の干満によって見え隠れする「沖の石」（岩礁）ではなく、「沖」にあり、かつ海底に沈んでいる「石」なのである。

従って、当時の人間にとっては、絶対に見ることは出来ない「石」、相手に知られることなど一縷の望みもない「石」なのである。

讃岐は、この報いられることのない片思いの恋、それでもなお恋せずにはいられない深い思いを「沖の石」に託して詠みあげたのである。そして、この深い片思いの慟哭は「人に知られで」といった並みのものではなく、「人こそ知らね」という強く相手に訴える表現によって、受けとる人（享受者）により強く迫るのである。

このようなことから父頼政など一族の歌人や多くの先輩たちに、直接または間接的に育まれての結果として生まれた名歌であることは、否定できない事である。